

■中根東里 儒学者。転変の後、下野国佐野に定着、自ら成したものの全て火に投じ、わずかに残るもので、天才ぶり。
なかねとうり
芭蕉+師宣没 1694＝ 伊豆下田で、三河の人で伊豆に流れ着いて当地に住み浅野氏を娶った中根重勝の子に生まれる。幼名は孫平、名は若思、字は敬父、東里と号す。後の名を貞右衛門。
生類憐令頂点 1695＝ 1歳：

赤穂浪士切腹 1703＝ 9歳： 生来嘘をつくことができず、母はとても俗世の塵には向かないと思っていたため、
・・・・・・ 1706＝12歳： 父が死去すると、_母によって禅寺に入れられ、剃髪して証円と名乗る。

徳川綱吉没・ 1709＝15歳： _読経を重ねるうちに、經典の本来の言葉である唐音を学びたくなり、
冥途の飛脚・ 1711＝17歳： _禅寺を飛び出して、宇治の黄檗山萬福寺に入り、中国僧に師事すると、瞬く間に上達するうち、
乾山陶器店・ 1712＝18歳： _単調な生活に耐えられず、山と積まれた中国渡来の書を読み尽くそうとするが、禅の修行は書見ではないと諫められ、江戸に博学で詩文に優れる荻生徂徠という人物がいると聞くと、萬福寺を飛び出し、徂徠門下の僧慧岩を頼って江戸に出、駒込の浄土宗蓮光寺に寓する。大藏経を読破するなど博覧強記ぶりを發揮、噂を耳にし荻生徂徠から呼ばれ、言語能力に驚嘆した徂徠から入門を許されると、漢詩に興味を持ちだし、早速作詩して徂徠に見せるも冷淡に扱われる一方、左伝など漢書を読むように言われるとそれにも熱中し、左伝の序まで作って褒められ、呂蒙の一伝を書いて献上して激賞され、江戸に名声が響くようになるが、それがストレスになって病臥、たまたま目にした「孟子、浩然の気の章」を読んで悟り、還俗を決意して、帰郷。悲しむ母を伯父が説得してくれ、江戸に戻れば慧岩も平気で蓮光寺に置いてくれることになったが、激怒した徂徠とその高弟らによって排斥される事態に、'徂徠の虚名を頼りに名を上げようとした己を恥じ、書きためた詩文を全て燃やしてしまい、真の生き方が始まる。とはいえ、これからどうするか進退極まるさなか、(慧岩の配慮で)文武両道に練達した天下一名高い浪人細井広沢が来訪、自分のもとに来てくれと懇願され、本郷の細井宅に逗留、あばら屋ながら蔵書の凄さに驚嘆、やがてその生き方に感銘するうち、

徳川吉宗将軍 1716＝22歳： _詩文の名声を聞いた加賀藩儒室鳩巢から書状、鳩巢に従って金沢へ下り、弟子となって貞右衛門の名を贈られる。金沢で、ひたすら四書を読み、研鑽を積むうち、評判は上がる一方で、ついに加賀藩から仕官の要請があると、儒学者は高額で仕官するのが当たり前という世の中で、'学問して禄を貰う訳にはいかぬ'と固辞、師鳩巢の許しも得て、江戸に戻る。

御蔭参流行・ 1718＝24歳： 江戸八丁堀の裏長屋で終日書を読んで暮らす、蓄えも底をつき、いよいよ餓死かと思った時、
・・・・・・ 1719＝25歳： 鎌倉にいたこれまた世渡り下手な弟淑徳を思い出して、一緒に住むことにし、弟の嫌がる下駄売りを始める。鶴岡八幡宮の鳥居下で漢籍を読みながら売っているうちに。評判が立って少しは食べれるようになったが、病になった長屋隣人を見かね、典籍や衣服を売り払い、粥をつくるなどして、これを救い、

小石川薬園・ 1721＝27歳： 男の病が回復すると、'このまま長屋にいては、あの男も気まずかろう'と、兄弟は鎌倉を離れ、伝手を頼って、江戸弁慶橋近くの町木戸の番太郎となり、竹皮草履を作って売りながら、書を取り寄せては読みふけるうち、_たまたま隣人の幼児虐待の有様を目にするも、救済することも出来ず、'何のために学問してきたのか'と悩む。そのような折「王陽明全書」に出会い、これまでの霧が消え去るのを感じ、ひたすら王陽明の著述を読みふけ、'書物を読んできた自分の使命は、人々にそれを説き、自ら行うことではないか'との考えに至る(知行合一)。そのうち、下野国佐野出身の金束信甫という人物が弟子入りしてきて、江戸の下宿先の大きな伝馬屋の主人にも講義して欲しいと言われ、久しぶりに座敷で寝起きするも、まもなく退去するが、徳を慕う町民が増えて来て、請われれば書を講じるようになる。
・・・・・・ 1730＝36歳： この頃、*金束信甫から'故郷の人たちに是非講義を'と懇請され、下野国佐野に下り、用意された(泥月庵(後に知松庵))に住んで、町の子供らに王陽明の伝習録を講義を始め、

享保大飢饉・ 1732＝38歳：
・・・・・・ 1737＝43歳： 弟子を教育するため*「学則」を作成。
・・・・・・ 1738＝44歳： この年に死を迎える母の世話をして看取るまで3年間のみ浦賀に戻ったほかは、
♫船出没始 1739＝45歳：

_30年余りをこの里で暮らし、生涯娶ることもなく、瀕死状態になっていた弟の幼女芳子を引取って育てながら、村人に書を教え、清貧ながらも人々に慕われて生活を送り、
忠臣蔵・・・ 1748＝54歳：

徳川吉宗没・ 1751＝57歳：

源内物産会・ 1757＝63歳：

大岡忠光没・ 1760＝66歳：

・・・・・・ 1762＝68歳： 姉の嫁ぎ先であり母が暮らした浦賀に往き、

蘭銭初輸入・ 1765＝71歳： *姪芳子の生い立ちと佐野に来るまでの経緯、幼女に教える思想の精髓を、驚くべき漢体の名文の冊子にした「新瓦」のみを遺して、没した。
自ら成した文章などをことごとく火に投じてしまう生き方をしてきたため、遺品や遺稿と言うべきものも殆ど残っていなかったが、後に、そのわずかな詩稿を目にした柴野栗山・太田錦城らがその才能に驚嘆し、'慶元以来稀有絶無の天才'と評している。

磯田道史「無私の日本人」、インターネット「下田の栞」ほか、